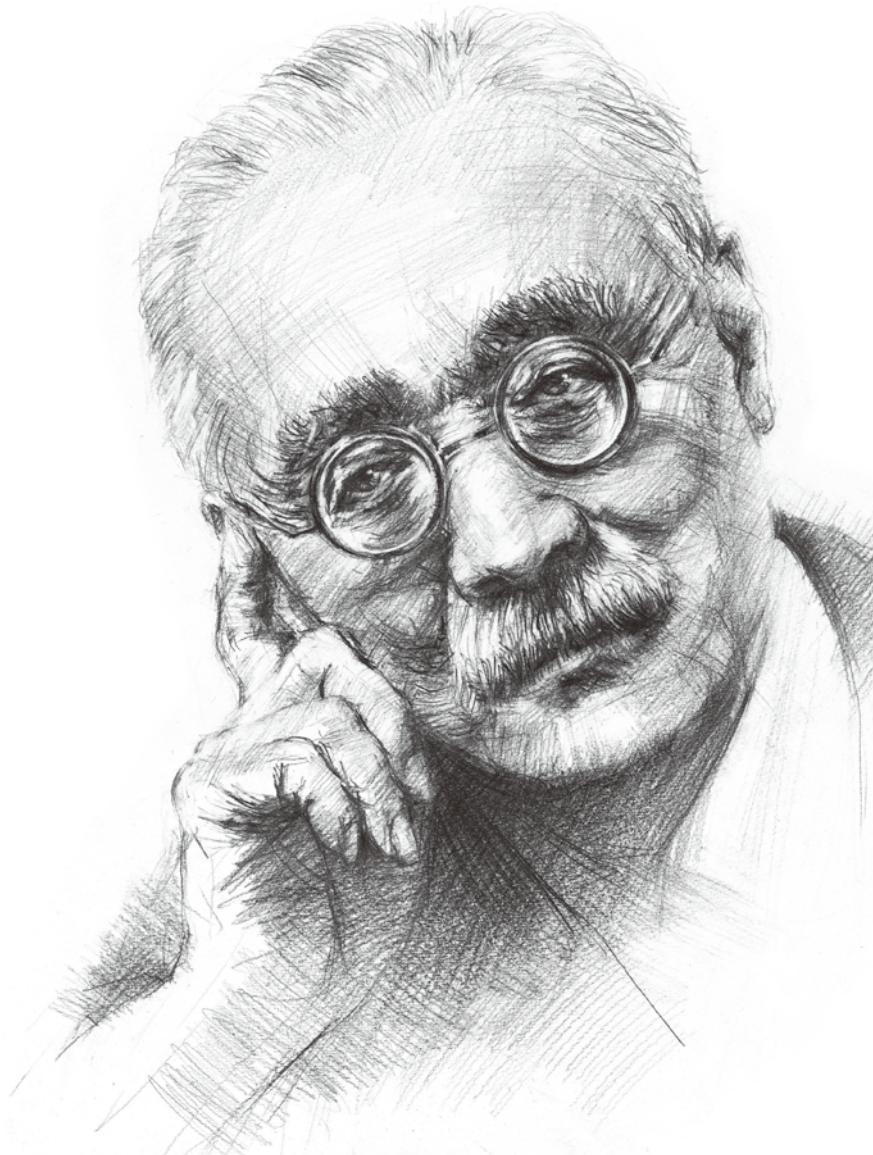


# 全人類が兄弟となり、戦争が人類を引き裂くことのない未来を私は夢見る。



「戦闘は攻撃的であれ防御的なものにせよ、野蛮であり不正である」――

これは1900年、一人の日本人が英文で著わした著作『BUSHIDO, The Soul of Japan=武士道』の中の一節である。

そう、この人物こそ

農学博士、国際平和主義者、愛の教育者、「願はくはわれ太平洋の橋とならん」との名言で知られる、新渡戸稟造その人に他ならない。1862年、南部藩士の末っ子として盛岡に生まれる。

91年、母校・札幌農学校の教授に。94年には貧しい家の子供たちのため日本初の夜学校も設立。生徒の月謝なし、教師の給料なし、

稟造ならではの愛の教育の実践であった。

迎えた1920年、国際連盟の事務局次長に就任。

「国際間の平和を確立しようとするならば、

まずもって各国人が互いに理解し合い、

相互にその長所を認めて尊敬する必要がある」と、国際知的協力委員会（ユネスコの前身）を設立。それは、真の平和を

学問と芸術の最高峰の上に打ち立てようという、

壮大なるプロジェクト。

委員にはペルクソンはじめ、アインシュタイン、

キュリー夫人など、最高の硕学が参集した。

24年には、「人類は子どもに対して

最善のものを与える義務を負う」と謳った、

『子どもの権利に関するジュネーブ宣言』を採択。それは1989年に国際連合総会において成立した『子どもの権利条約※』の先駆けとなるものであった。

ところが、27年に帰国した稟造が待っていたものは国際連盟への無理解、そして国際感覚の欠如。

その後、終生貴族院議員であり続け、

軍国主義に向かう政府に警鐘を鳴らしていく。

「軍備自体が敵を招き寄せる

ことを知る人は、少しあらない」

「剣で取ったものは、また剣で必ず取られる」…

講演や執筆を通じて、国際協調と

相互理解・対話の重要性を強調する稟造。

争いへとひた走る当時の日本と世界へ向け、その魂の底から平和を訴え続ける。

しかし1933年、日本は国際連盟を脱退し

世界から孤立。そしてその年の10月、

稟造は72年の生涯を閉じたのであった。

彼は国際人として日本人の眼を世界に開かせ、

さらに日本人として世界の眼を日本に開かせた。

没後約70年の時が流れだが、世界では未だに各所で戦争・紛争の絶えることがない。

家を奪われ、家族を奪われ、自身の生命までもが奪われていく子どもたちが存在する。

自然を、小さき者を、弱き者を愛した新渡戸稟造。「全人類が兄弟となり、戦争が人類を引き裂くことのない未来を私は夢見る」。

これは死の5ヵ月前の言葉であり、3ヵ月前には「何といふ騒がしさ。何といふ混乱。

世界は激痛と怒りに引き裂かれている」と発信。

その心の中に国境という概念はなく、

ただ正義と平和への希求があつたのみである。

\*子どもの権利条約は、基本的人権が子どもにも保障されるべきことを国際的に定めた条約。前文と本文は4条しかないが、第35条4項には「国際人道法の義務にしたがって、武力紛争の影響を受けた子どもたちを守り世話をために、できる限りの手をつくすこと」(部分)とある。なお、同条約の締結国・地域は192。署名のみで、未だ批准していないのは、ソマリアとアメリカの2国のみ。

## 「子どもたちの子どもたちの子どもたちのために」